

第十二講 文化史学とは

我が国における戦後歴史学

日本における講座派と労農派の論争（1930年代）

日本における資本主義的關係は未成熟

封建制の段階にとどまっているのかそれとも資本主義の段階に入っているのか

講座派：野呂栄太郎・山田盛太郎ほか

日本の政治体制を絶対主義ととらえる

日本の社会経済体制を半封建的地主制

二段階革命論

コミンテルンの戦略と合致

労農派：荒畑寒村・山川均ほか

明治維新＝不徹底なブルジョワ革命

日本における市民層の未成熟

資本家層と封建層との妥協

天皇制イデオロギー

社会主義革命

階級闘争史観

日本社会の非合理性・後進性を強調し、革命による近代化を希求

英米などの西欧を理想化

革命史への傾斜

清教徒革命・アメリカ独立革命・フランス革命・二月（三月）革命

ロシア革命

ワット・タイラーの乱やジャックリーの乱・スパルタクスの乱

国民史の枠を超えず

創られる過去、創られる記憶

民族主義・国民国家統合のシンボル

金沢城

平城宮跡

アクロポリス

革命後のロシア：レーニンが善玉で、スターリンが悪玉か？

文化史学に対する偏見

文化という非政治・非経済・非社会領域を扱っているに過ぎない
主観的な美学的解釈に依存
歴史を規定するのは下部構造
生産と生産関係
上部構造に過ぎない
「存在が意識を規定する」という命題
二次的・副次的
現実に役に立たない貴族趣味

歴史学の多様性

歴史学の主軸の変化

流行・主流の分野の変遷
外交史から社会経済史へ
社会経済史から社会史へ
社会史から新文化史へ

ナタリー・デーヴィス、カルロ・ギンズブルク、ル・ロワ・ラデュリ、ピエール・ノラなど

歴史学の多様化

歴史学の本質についての不明確化

対極としての文化史学の不明確化

歴史学との差異が不明確に

多くの研究が歴史学の一分野として発表され、評価される
社会史のコンセプトと文化史のコンセプトの近似

文化史学への回帰

マルクス主義の文化史に関する定義に対する疑問

「存在は意識を規定する」

下部構造（生産力）が上部構造（意識）を規定する
生産力が同じでも意識が異なるのは何故か？

何故、日本でマックス・ウェーバーが注目されてきたのか？

大塚久雄の疑問

マックス・ウェーバーの「エートス」論

泥棒資本主義（儲ければ良い）

経済活動の使命感と社会的倫理の存在

経済活動のパターンの相違

行動パターンと文化との関係

発想や思考と文化との関係

政治経済と文化との関係

これらの根底に文化による枠組みがアприオリに存在している

なぜ、日本人は英語を話せないのか？

グローバル化の中で日本の特異性をどのように説明できるか？

文化と経済の並列関係

相互に影響し合うが、それぞれ独立した領域を有する